

2021 年 5 月 31 日 9:30～11:30

須坂市役所 305 会議室

1 開 会（清水教育次長）

2 あいさつ（小林教育長）

●私達の社会はソサイエティ 5.0、そういう時代その中のコロナ渦という時代です。まさに社会が激変する真只中にいます。加えて、私達の前には少子化という厳然とした事実がございます。これからの社会を生き抜いていく子どもたちがそのような状況の中で希望をもって学びを進めるために、学びの質を落とさない教育環境を考えていくことは、大人の重要な責務だと考えています。

●そういうことから昨年度は、須坂市小中学校の学びのあり方検討会議を開催して、本日お越しいただいている信州大学の伏木久始先生に座長をお願いし、小中学校の学びのあり方について委員の皆様方から多くのご提言をいただくことができました。

●その中の議論で、学びの質というものを考えたときに、果たして小中学校だけの問題として考えていいのかどうか。学びのスタートは小学校 1 年生ではないぞと。幼児期の遊び込む姿の中にある、学びは小学校にどう引き継がれているのだろうか。あるいは 0 歳から 18 歳まで多様性のあるそれぞれの可能性を伸ばす教育はこれでいいのだろうかといった新たな問いも生まれてまいりました。

●教育委員会は、これらの問いが須坂市の子どもたちの学びの質を考えていく上で大変重要なポイントなどを考えました。そこで、もう 1 年かけて新たに深めたい 4 つのテーマに絞りながら子どもたちの学びの質を高めるためにはどうしたらよいか、さらに深めたいと考えました。

●そして、それらの議論を踏まえた上で、次年度以降になりますが、さらに深刻になる少子化に向けて、須坂の子どもたちにとってどのような学びの場が必要なのか。それを見定めていこうと考えております。

●本日はその初回ということであります。幼児期から始まる非認知能力を育む取り組みについて討論をしていただきたいと考えています。

●本年度は、それぞれのテーマに沿ってゲスト委員をお招きして学ばせていただきたいと考えました。本日ゲストは、上越教育大学大学院学校教育研究科 准教授の山口美和先生にお越しをいただきました。先生は長野県のご出身でありまして、信濃毎日新聞にコンパスという連載記事がありますが、大変わかりやすい文章で私達に幼児教育をはじめとする教育についてお話をしていただいております。

3 検討会議の目的と日程について（中村学校教育課長）

●子どもの学びのあり方検討会議の目的につきましては、ただいま教育長の方から挨拶があ

った通りでございます。子どもの学びと内容の方法について、去年と今年で、その方向づけをしていきたいと考えています。

●少子化に対する対応につきましては、この検討会から提案をいただきたいと考えておりますのでよろしくお願いいたします。

●この会議を今年6回予定しております。今回テーマは、「幼児期から始まる非認知能力を育む取り組みについて」です。次回以降のテーマは、「個別最適な学びと自律的な学びを進める取り組み」「特別支援教育の視点から、一人一人の可能性を伸ばす取り組み」「学校運営や教育を取り巻く地域活動に関する取り組み」この4つのテーマについてです。

●また、市民の皆様にも議論の経過を見ていただくために、オンラインでの会議も検討してまいりたいと思っています。

●テーマに応じて、本日の山口先生のようにピンポイントで有識者の方に参加していただく予定です。

●最後に「少子化に対する対応」につきましては、この会議からいただいた提案を基に、来年度以降、市民委員交えた審議会を設置して慎重に検討を進めたいと考えています。

●資料4ページをご覧ください。今年度の日程です。本日が第1回目になります。第2回目は7月27日。このときは小中学生との対談ということで、子どもたちが実際にどのように考えているのかということをお聞きしたいと思っています。子どもたちを実際に呼んで子どもたちと、こちらにいる先生方、伏木先生に入っていて、子どもたちの考えを引き出すという会議を予定しています。他の委員は、その様子を見ていただいて3回目以降の議論に活かしていただきたいと思います。第3回目は8月24日。2つのテーマについて議論いただきたい。第4回目は10月6日。ここでは新しい形の学校の視察として、信濃小中学校へ実際に見に行きたいと考えております。

第5回目は12月17日。2つのテーマについて議論いただきます。このときに少子化に対する対応案についてご意見いただきたいと思います。

第6回目は1月24日。まとめに入りたいと思います。

4 自己紹介

伏木委員：

●昨年に引き続きよろしくお願いいたします。

勝山委員：

●信濃教育会総務部長。信濃教育会の前は須坂市の小中学校いました。

本多委員：

●須坂高校校長。昨年に引き続きよろしくお願いいたします。

山岸委員：

●教育現場にいた者として、自分も振り返りながら考えさせていただきたいと思います。

新野委員：

●以前上高井郡市PTA連合会副会長を務めさせていただきました。

宮川委員：

●現在長野県PTA連合会の副会長を務めさせていただいています。

垂澤委員：

●須坂双葉幼稚園長。昨年は緊張して楽しくできなかったのですが、今年は楽しみながらぜひ自分も勉強して、この場にいられることを幸せに感じながらやっていきたいと思っております。

坂口委員：

●須坂東部保育園長。新しいことが始まるってことはとても素敵で、緊張の中にはワクワクがあって、皆さんに失礼のないよう、一緒に学ばせていただきたいと思います。

佐藤委員：

●豊洲小学校校長。本校で自立的な学びということで取り組んでいる内容等この会議の項目にもなっておりますので、勉強させていただきたいと思っております。

田尻委員：

●今専業主婦で子どもが2人。小学2年生の男の子と、あと年中の男の子。今回この委員のお話を聞いた際に正直、教育分野での学識がないので不安でした。子どもたちが須坂で教育を受けていく中で、保護者として勉強できたらなと。

●また子どもたちが大人になっても、お母さんでも日々勉強していて、チャレンジすることの大切さと姿を伝えていきたいと思い、参加させていただくことにしました。

島田委員：

●東中学校長。少子化の話が先ほどありましたけれども、その一番の当事者となる東地区の校長として、この会議での様々な議論に関わっていきたい。

(事務局)

清水教育次長、中村学校教育課長、小林学校教育課長補佐、学校教育課月岡 ESD 指導員、北村指導主事、後藤主任指導主事

5 座長選出

清水次長：

●第1回目ということで座長を選出したいと思いますがお考えありましたらお聞かせ願います。

小林教育長：

●昨年座長を引き受けていただいた信州大学の伏木久始教授に今年も座長をお願いしたいと思いますが、皆さんよろしいでしょうか。

(委員了承)

清水次長：

●この後の進行は伏木先生をお願いしたいと思います。

伏木座長：

●微力ながら今年度いっぱい皆さんと一緒に頑張りたいなと思っております。

6 議 事

テーマ「幼児期からはじまる非認知能力を育む取り組みについて」

(1) 山口美和委員より実践事例の紹介と須坂市への提案

山口ゲスト委員：

- ジェームズ・ヘックマンが書いた本のなかで非認知的スキルについて注目が集まった。この中で、幼児期に教育投資をしっかりと行った子どもは将来にわたって、例えば犯罪を起こす確率が少ない等の研究データをもとに、人生を幸せに過ごしていくために幼児期の教育が重要で、認知的スキルだけでなく、非認知的スキルも欠かせないと言っている。
- 非認知的能力とは、肉体的健康や精神的健康、根気強さ、注意深さ、意欲、自信。これらのスキルのほとんどは幼少期に発達する。
- 今の幼児教育に少し足りないものがあるとすると、粘り強さとか諦めずに挑戦する気持ちを伸ばしていくことが必要なのではないか。
- 認知的スキルと非認知的スキルは絡み合うように伸びていくこと意識して援助する。例えば、遊びに集中して取り組む中で、考えたり工夫したりするようになる。
- 非認知的スキルは保育者が遊びと環境を用意することで高めることが可能であることを意識する。
- 幼児期の教育の2つの基本として、環境を通した学びと遊びを通した学びがある。豊かな環境を構成し、遊びの質が高まるよう援助することが大切。
- 自発的な遊びの時間がたっぷり保障されることで、好奇心や探究心が培われ、主体的に学ぶことにつながる。
- 遊びとは、自由で自発的な行為。その活動がその活動の主体にとって楽しいことが大切。子どもが自発的に遊ぶということを援助することが一番の基本になる。
- 遊びの質を高める援助とは、子どもたちが面白さを追求する過程で、遊びの課題が更新されていくことが必要。「もっとこうしてみたい」「次はこうしよう」。例えば、泥団子を作ったら、次は売ってみたい等。次のステップにつながっていくことが大切。
- 保育者が入ることで、子どもが自発的にはじめた遊びを壊さないことが重要。子どもから求められたときに必要な支援を行う。子どもが自分で考え、発見する喜びを奪わない、教えすぎない。
- 保幼小接続のために押さえておきたいポイントとして、「幼稚園は義務教育やその後の教育の基礎を培う」（学校教育法第22条）の意味は、小学校教育の先取りをするという意味ではないことに注意。小学校では幼児期に培われた「学びに向かう態度」を活かす指導が大切。
- 教師は、幼児期の学びや経験を理解した上で、それをさらに伸ばすようなかかわりが必要。
- そのためのヒントとして「幼児期の学びのスタイルを継続できる教科」として小学校「生活科」を活用することが考えられる。生活科は、体験的な学習が中心で、幼児期の教育との親近性が強い。
- 非認知的スキルを伸ばすために就学前施設では、子どもが集中して好きな遊びに取り組める自由遊びの時間をたっぷりとる。広い空間で伸び伸びと遊ぶために、できるだけ屋外を活用。保育者は直接教えすぎず、子どもが自分の力で考えたり工夫したりするのを期待して見

守る。

●小学校では、就学前施設で子どもがどんな経験をしてきたかを理解し、学校生活の中でも子どもの力を活かすようにする。失敗したり間違えたりするプロセスこそが子どもにとっての学びだと考え、結果だけを重視しないようする。失敗を恐れずチャレンジすることが素晴らしいを伝えることで、非認知的スキルが伸ばされていく。

(2) 県教委作成の「園・小接続カリキュラムの開発」と須坂市の取り組み

中村学校教育課長：

●県教委作成の冊子「園・小接続カリキュラムの開発」については、予め委員にお配りしているため、私の方からは簡単に説明いたします。

●本冊子は、各市町村や各園・小学校が作成する接続カリキュラムの開発を支援することを目的に作られています。

●須坂市ではこの冊子をテキストとして、保育園と小学校の長が意識を変えていくための「保小連携推進会議」を4月27日に開催しました。

●保育園も小学校も子どもたちの育ちに関して目指すところは同じだということを改めて理解し共有しました。今後も引き続きこのような会議を開催していきたいと思います。

●本会議を受けて、それぞれの小学校、保育園で具体的な取り組みが始まります。どんな取り組みがされたのかについては、このような会議で報告していただきます。

●秋の保小連携推進会議では、私立の保育園、幼稚園の園長先生方にも参加いただきながら須坂市全体で幼保小連携を進めていきたいと考えております。

(3) 意見交換

本多委員：

●山口先生の方から、大人が我慢して見守らなければならないという話があった。園の中で、先生方にどこを我慢させて、どこは手を出してよいとしているのか。先生方の意識統一が重要だと思うが、その辺りを教えていただきたい。

山口ゲスト委員：

●附属幼稚園は、担任と副担任が毎日、10分程度振り返りを行って、あの時どうして手を出したのか、どうして見守っていたのかということを共有するようにしている。また週1回、全職員で1時間程度、情報共有をすることで意識統一につながっている。

佐藤委員：

●山口先生の話の中で、子どもが水を流したくて30分もかかったという話があった。子どもが、そこまで粘り強く同じ遊びをつづけた根拠は何だったのか。

山口ゲスト委員：

●理由は不明だが、年長児の姿が憧れになっていたかもしれない。一般的に一人遊びをしている子は心配だと言われることがあるが、1人でも集中して遊んでいるときは見守ることも大切。

勝山委員：

●幼稚園や保育園から小学校への接続の時に伝える方法・情報について、新しい試みがあれば教えていただきたい。

山口ゲスト委員：

●私も同じ課題を感じている。普段の連絡会みたいなどのような仕組みを作ると小学校の先生に上手く伝えられるのか、保育園の先生方にもお聞きしてみたい。

垂澤委員：

●幼小接続と幼少連携の違いを課題と捉えている。県の冊子によれば連携とは、園と小学校の教職員が一緒に行くこと。交流会、連絡会。接続とは、子どもの育ちがつながること。（発達が学びをつなぐ）とある。これまで、この違いについて深く考えたことはなかった。

●幼保小連絡会の形骸化。

●本年度、本園では学びの継続性に注目して、園外研究に取り組んでいる。

山岸委員：

●保護者の方の理解も重要になってくると感じている。山口先生の話しを保護者も共有できていれば、小学校の入学者保護者連絡会も変わってくる。保護者の安心感も変わってくると感じた。

●本多委員：

須坂高校の部活動の目標は非認知能力を育てる。クラブ活動は意外に非認知能力を潰しかねない。そのために生徒の自主性を尊重するため、先生方にあまり指示命令をできるだけしないように職員会で伝えている。

坂口委員：

●須崎市立保育園では、2021年度須崎市立保育園グランドデザインに基づいて保育を行っている。未就園児も同様に考え、子育て支援センターとも連携をしている。

●保育士同士の振り返りの時間がなかなか取れていない。課題だと感じている。働き方改革も大切。

●保護者との情報共有

●保育園間や保育園から小学校等、職員が変わると変わってしまうものではなく、継続できる子どもの育ちに沿ったカリキュラムが大事だと思っている。

佐藤委員：

●小学校の立場で接続の現状と今後の取り組みについて話したい。

●幼保小連携の重要性については園も小学校も共通のところ。

●ゼロからのスタートではないとよく聞かすが、小学校において新しい生活が始まるという点では、適応するかという点においてはゼロからのスタートになる。

●幼保園、小学校がそれぞれの取り組みを理解し合うのが大事だと思うっている。

●各小学校長はそれぞれの関係箇所と動き出している。例えば、生活科の授業内容を保育園の先生方にも入ってもらい考えている。また、共通の活動を園から小学校までつなげてやる

うとか。ある学校では、隣接する園から子どもを呼んで体育集会を一緒にやる等、子ども同士のつながりを検討している。

●園と小学校での理念の共有のためにも動き出している。

新野委員：

●保護者が考え方を変えていかないと、ここでの話しが成就しないと感じている。

●普段、働いていると効率的に生きることが目的になっている。ここで話しているのは、より効果的にするためにはどうすればよいかとう話だと思う。

●保護者のレベルを上げる機会をたくさん作っていかないと、今、保護者の意見はまるで外注先に何かうような言い方になってしまっている。だけど、将来をより良いものにするのであれば、私たちの子どもが立派な大人に育っていくしか方法がないということ。

田尻委員：

●自分の子どもたちには、命と一緒に学んで欲しいと伝えている。自分以外の人間をどう見ていくか、これから大きくなるにつれて大事ことだと思っている。

●非認知能力という言葉は聞きなれない言葉。保護者がもう少し学べる機会があってもよいと感じた。

宮川委員：

●企業の中でも、常に待ちの大人が増えていると感じている。普通に出勤してくることを褒めないと続かない。大人が子ども化していると感じている。

●非認知的スキルのような学びを大人や保護者が一緒に学んでいかなければ何も始まらないと感じた。

(4) 次回内容について

中村学校教育課長：

●第2回目は、小中学生の意見を直接聞いてみるという感じで、伏木座長、後藤主任指導主事、北村指導主事、宮崎委員が対談します。場所は生涯学習センターの3階ホールです。

7 閉 会

清水教育次長：

●以上で、第1回のあり方検討会議を終了します。